

「誰もが立ち寄れる雰囲気のある居場所」に関する一考察 —— 第三次西東京市地域福祉活動計画の実践活動から ——

日本社会事業大学

院前期 2004 年卒 三 輪 秀 民

I はじめに

1 研究の視点

住民主体の地域福祉活動計画として策定された「第三次西東京市地域福祉活動計画（平成 26 年度～ 30 年度）」（以下「活動計画」という）を実施するための組織として、平成 26 年 6 月に発足した「*推進部会」は、活動計画で示された 8 つの活動を 3 部会で分担し、活動計画の実現に向けて具体的な活動を開始した。このうち、筆者が所属する「居場所部会」は「よってらっしゃい」という任意団体をつくり、「誰もが立ち寄れる雰囲気のある居場所」を実現するための実践を開始した。

平成 28 年 2 月に、西東京市社会福祉協議会（以下「西東京市社協」）の地域活動拠点の 7 番目の拠点として西東京市緑町 2 丁目に「ほっとハウスみどり」が開設され、「よってらっしゃい」は開催会場を確保することができ、安定的な運営が可能になった。現在、主として、①高齢者同士の懇談②高齢者と小学生の世代間交流③介護予防体操、などのプログラムを中心に展開しているが、実践して初めて分かった課題も多い。

本研究では、居場所をつくり、運営していく際の課題を抽出し、その解決に向けての方策を示すことを目的とする。

*（注）推進部会は、居場所部会・人材部会・情報部会の 3 部会で構成されている。

2 研究方法

活動計画の進行状況を評価・管理する「進行管理委員会」や計画を具体的に実践している「推進部会」の委員、居場所部会の実践部隊である「よってらっしゃい」のスタッフや利用者などへのヒアリング、「西東京市高齢者支援課」・「西東京市社協」・「緑町地域包括支援センター」などの福祉関連機関の職員などへのヒアリング、そして参考文献などを分析することを通じて、課題を抽出することとした。

中でも、筆者は利用者の意見を重視した。というのは、計画の基本的なコンセプトである「誰もが立ち寄れる雰囲気のある居場所」を具現化している「よってらっしゃい」が提供するサービスを受け入れるか否かを決定するのは、「よってらっしゃい」の利用者に他ならないと考えるからである。また、参考文献では、いろいろな分野の識者が居場所をどのように捉えているのかについて分析した。

II 倫理的配慮

本研究に当たっては、筆者が社会福祉士として所属している社団法人日本社会福祉士会の倫理綱領を遵守した。特に、IV 専門職としての倫理責任第 7 項「社会福祉士は、すべての調査・研究過程で利用者の人権を尊重し、倫理性を確保する」に配慮した。

Ⅲ 調査結果

1 「居場所」に関する文献調査

「居場所」をテーマにした文献で、どのような視点で述べられているのか分析した。

表1 「居場所」に関する文献調査

	内 容	出 典
1	①コミュニティセンターは、一日中囲碁や将棋をさす高齢男性であふれ、図書館も一日中新聞や雑誌を読む高齢者男性だらけである。……そうだ、高齢男性は、本当にほかに居場所がないからだ。(P.132)	『居場所のない男と時間がない女』(水無田気流・社会学者)
2	①人は自分を救助するための居場所を求めて彷徨するけれど、もともと居場所は自分の中にあっただものかもしれない。(P.9)	『僕たちの居場所論』(内田樹ほか)
3	①居場所という言葉だけを聞いて、多くの人たちが思い描きやすいのは、家庭、故郷、会社、友人、親、子ども、学校など、何か所属感や帰属感もたらしてくれるものかもしれません。(P.21) ②居場所とは、自分が自分であるための場所(北山修)(P.45) ③場の保障によってその人がその人らしくできる場(P.45)	『「心の居場所」の見つけ方 一面接室で精神療法家が行うこと』(妙木浩之・臨床心理士)
4	①居場所とは、客観的な状況がどうなっているかではなく、本人がそこを居場所と感じているかどうかによってしか測ることのできない、極めて主観的なものです。(P.13)	『居場所の社会学—生きづらさを超えて』(阿部真大・社会学者)
5	①居場所とは、自分が安心してそこにいい、と思える場所、自分がそこにいることを認められている場所です。(P.116) ②心の居場所の条件は、安全と秩序である。(P.146)	『自分の居場所のみつけ方』(斎藤学・医学博士)
6	①身をおく場所としては、公(外)と私(内)の2つの空間が必要である(P.11) ②公的空間とは、自分を外に向けて表現する場所、私的空間とは、だれ憚ることなくごろ寝できる場所であると思いたい。(P.11)	『定年後の居場所を創る』(加藤仁・ノンフィクション作家)
7	①居場所とは、そこにおいて自己の存在を確認する場所である。(P.256) ②男性にとっての居場所とは、活力発言の場である。(P.256) ③女性にとって、人生のそのものが居場所なのだ。(P.257)	『男の居場所』(八木義徳・芥川賞受賞作家)
8	①あれだけ親を避け、嫌っていたいながら、最後の最後で親を頼ろうとしている自分がある。自分の弱さが情けなかった。自分の心のどこかで「居場所」の一つと考えている自分がある。(P.74)	『私は「居場所」を見つけない』(来家恵美子・女子ボクサー)

2 ヒアリング結果

利用者との面談で①「よってらっしゃい」の気になっている点②改善した方がよい点、の2点についてヒアリングした結果は、以下の通りである。

表2 ヒアリング結果

	気に入っている点	改善した方がよい点
A・女	①スタッフがきめ細かく気を使ってくれる。	①ありがたいと思っており、今のままでよい。
B・女	①コーヒーや菓子などを利用者に運ぶなどのお手伝いができ、体を動かす機会をもてることは、自分のライフスタイルにあっている。	①おしゃべりだけでなく、たまには特別な行事も欲しい。 ②おしゃべりの合間に運動を取り入れては？
C・男	①自分を受け入れてくれている。 ②勧められて他に2ヶ所サロンに行ったが、既にグループができていて、話の中に入っていけない。二度と行く気にならない。	①介護体操(椅子に腰掛けてやっている)については、そんなに激しいものではないので良い。 ②体操ができない人は(別室で別メニューを用意)見ているだけでも良いのではないか。
D・男	①来るのを楽しみにしている。	①ほかに男性がいるので、気が楽である。
E・男	①来るのを楽しみにしている。	①特にない。

F・男	①来るのを楽しみにしている。	①小学生の騒ぎ声が気になる。 ②体操は苦手である。
G・女	①来るのを予定に入れている	①何かお手伝いをしたい。

IV 考察

1 「居場所」に関する文献調査から見えてくること

- (1) 「居場所」をタイトルに使用しているものの、その定義を明らかにしていない文献や居場所とは直接には関係ないものも散見された。
- (2) 水無田は図書館で過ごす高齢男性を見て、「彼らは本当にはかに居場所がないのだ」と記述している(表1-1)。因みに筆者は東久留米市や西東京市にある公共の図書館で平日に観察したところ、確かに高齢男性が多いが、高齢女性や若者もいる。筆者はこの事実から、「高齢男性や高齢女性にとって図書館が立派に居場所の機能を果たしている」と捉えたい。図書館で過ごすことは、①外出することで社会参加になること②情報収集で知的満足を得ること、などを意味しており、本人にとって大きな意義があるからである。
- (3) 上から目線で、高齢男性に対し「どこでどのように過ごすべきだ」などということは大きなお世話というものである。どこでどう過ごそうとその人の人生である。ただし、家に閉じこもり、社会と隔絶している人も少なからずいるのも確かである。彼らに社会参加を促すことは大切である。その意味で各市町村に設置されている「地域包括支援センター」の職員が閉じこもっている高齢者にアプローチして、社会参加を促していることを筆者は承知しており、大変意義のあることと考える。「よってらっしゃい」もその受け皿の一つでありたいと考えている。
- (4) 筆者が考える居場所の具体例をいくつか上げてみよう。筆者住んでいる近所にK駄菓子屋がある。ほぼ毎日午後から夕方にかけて、

そこで小学生が菓子やカップラーメンを食べたり、パチンコのような遊具で遊んでいる風景を見かけるが、これなども小学生にとって「居場所」になっている。次に、筆者の近くにあるLコンビニ内のコーナー(「街カフェ」と称している)で毎朝コーヒーを飲み、ドーナツを食べている人を見かける。コンビニのコーヒーは本格的煎れており大変美味しいそうである。これなども利用している人にとって「居場所」になっている。

- (5) 以上を踏まえ、筆者は、「居場所」を次のように定義する。居場所とは、「その人にとって定期的に一定時間を心穏やかに過ごし、安らぎを得ることができる場または空間」をいう。居場所はそのお人にとって、一ヶ所である必要はない。いくつもの居場所があっても良いのである。また、居場所には、「ハード面」と「ソフト面」があると考え。「ハード面」とは具体的な場や空間をいう。例えば、上述で例示したコンビニのコーナーである。一方、「ソフト面」とは、「家の中にオレの居場所がない」というようなケースで、「家族の中で浮いている」、「存在感がない」、「暗に(場合によっては、明らかに)迷惑がられている」というようなニュアンスで用いられる「抽象的な場や空間」といえよう。

2 ヒアリングから見えてくること

- (1) 現在の「よってらっしゃい」は概ね好意的に評価されている。逆にいうと、気にいっているから、「常連さん」になっていただいているのであり、そうでなければ、足を運ばないということだろう。1回来ただけで、その後姿を見せない方もいる。
- (2) 水曜日の午後は「よってらっしゃい」が必ず開催されているということも信頼感に繋

がっていると推測される。祭日および年末年始を除き年48回開催している。

- (3) 運営については、毎回終了後、約1時間、スタッフは振り返りを行っており、利用者の希望が良いものであると思われるものは取り入れるなど運営方法も適宜改善していることが受け入れられていると思われる。

V 課題

経営学では資源には、①ヒト②モノ③カネ④情報⑤ネットワーク、という5つの要素があるとされている。この視点は、福祉関連事業を展開する場合にも当てはまり、これらの5つの要素を念頭において運営をする必要があると考える。

「よってらっしゃい」の活動をスタートさせた当初は、これらの全ての資源が不足しており、どうすれば、うまく軌道に乗せられるか苦慮したものである。

そこで、上記の切り口で、「よってらっしゃい」は今後どのような課題があり、どのような処方箋が必要かについて考えてみたい。

1 ヒトに関連する課題

ヒトについては、利用者とスタッフの2つの面がある。

利用者に関しては、現在利用していただいている利用者に加えて、家に閉じこもりがちな方を開拓していく必要がある。そのためには、西東京市役所・地域包括支援センターなどとの連携、ITを活用した募集、などが考えられる。

スタッフについては、現在7名のスタッフはいくつものボランティア活動を掛け持ちしており、超多忙である。スタッフを増強して、例えば、月に1度程度は着実に休みをとれるような余裕ある運営をしたいと考えている。

2 モノに関連する課題

モノとは開催場所の確保である。活動を開始した当初は、会場の確保に苦労したが、平成28年2月から「ほっとハウスみどり」の

中に会場を確保できたので、安定した運営ができています。しかしながら、まだこの会場を十分に活かしきれていないのではないかと考えています。例えば、ほっとハウスみどりがある緑町近辺の複数の自治会のメンバーなどをもっと利用者に繋げるといったことが考えられる。

3 カネに関連する課題

カネとは運営資金をいい、安定的に運営するには運営資金の確保が極めて重要である。

「よってらっしゃい」は当初、フリーマーケットで確保した資金を原資として、会費100円を加え、細々と運営していた。

西東京市は平成28年度に「介護予防・日常生活支援総合事業住民主体型通所サービス事業」をスタートさせた。「よってらっしゃい」はこの制度を申請し、認可された。精算や申請などの手続き面では多少労力が必要であるが、運営に余裕ができることは大きなメリットである。特に、利用者に対する行事保険（東京都社会福祉協議会）を付保できるようになったことが最大のメリットである。今後は、補助金および会費を有効に使用し、内容を充実させていくことが課題である。

4 情報に関連する課題

情報には収集情報と発信情報がある。

情報収集に関しては、福祉関係の機関・施設との連携が重要である。

一方、発信情報に関しては、現在チラシを作成し、付近の掲示板数ヶ所に貼っている。今後の課題としては、推進部会の一つである「情報部会」と連携し、SNSによる情報提供に取り組みたい。

5 ネットワークに関連する課題

利用者を支援する方法の一つに、地域資源をネットワーク化すること、すなわち、ネットワークの構築があげられる。地域資源とは、地域包括支援センター・社会福祉協議会・老人福祉センター・特別養護老人ホームなどの機関・施設、医師・看護師・社会福祉士など

の専門職、ボランティアや親族などの人的資源を指す。

「よってらっしゃい」自身も、地域資源の一つとして認知されつつある。その証左として、緑町地域包括支援センターから、「“よってらっしゃい”で面倒を見て欲しい」と一人暮らしで社会活動の苦手な方を10人程度連れてきていただいた。1回目は職員が帯同し、サロンで一緒に過ごす。問題は、2回目に、一人で会場に来られるかが鍵である。最初はかなり多くの方が2回目には来られなかったが、最近では、一人で来られる方が増えている。しかも、男性が多い。その理由として、一定数の男性がいることが安心かにつなが

り、定着しつつあるのではないかと考えられる。

今後の課題として、一人で会場までくことに不安がある利用者については、よってらっしゃいのスタッフあるいは協力団体（ふれまち交流活動など）のスタッフが自宅までの出迎え・見送りをするなどの方策を検討したいと考える。

VI おわりに

筆者のヒアリングに協力いただいた利用者および関係機関の職員に対し、厚くお礼を申し上げたい。

<参考文献>

- 1 『「居場所」のない男、「時間」がない女』（水無田気流／日本経済新聞出版社／2015年6月1日）
- 2 『僕たちの居場所論』（内田樹・平河克己・名越康文／角川新書／2016年5月10日）
- 3 『「心の居場所」の見つけ方―面接室で精神療法家が行うこと』（妙木浩之／講談社／2003年9月10日）
- 4 『居場所の社会学』（阿部真大／日本経済新聞出版社／2011年8月23日）
- 5 『自分の居場所のみつけかた』（斎藤学／大和書房／2006年5月10日）
- 6 『定年後の居場所を創る』（加藤仁／中央公論新社／2004年9月25日）
- 7 『男の居場所』（八木義徳／北海道新聞社／1978年10月17日）
- 8 『私は「居場所」を見つけない』（来家恵美子／新潮社／2002年1月30日）